

令和 4年度 園評価書

園番号 45 園名 駒越こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心も体も元気な子	触れ合う・感じ合う・伝え合う	五感に働きかける遊びや自然と触れ合うことができる環境を室内、戸外に用意する	・散歩で拾ったものを遊びに取り入れ、取っつき棚や飾る場を作るなど、昨日の続きを大切に登園できるよう環境を整えた。又、保育者自身も玩具や道具を大切に扱う姿を見せることで子ども元々の場に返したり自分が作った物を大切に使う姿が見られるようになってきた。	A	A	・山を登る際には様々なルートがある。山頂に到着することが目的なので、どのルートを通ってもかまわないはずなのだが小学校では「ここを通りなさい」と支持をしがちになってしまう。しかし、こども園は子どもの決めたことを尊重し前に進むことを支えてくれている。とても良い教育保育をしていると思う。小学校でも生活科や総合学習ではできることだと思うので、ぜひ見習いたい	・引き続き、物の扱い方の手本を保育者が見せていく。又、散歩マップの活用など、園内だけでなく園周辺の環境においても把握することで、室内・園庭・園外それぞれのメリットを最大限に活かせるよう保育環境を検討していく。
		一人一人の遊びの過程や背景、心の揺れ動きを読み取り、相手の気持ちに気付けるような援助をする	・一人一人の子どもの姿を見取り、受け止めながら双方の気持ちを大切に、思いを伝えたり聞いたりできる関わりを意識したことで、相手の気持ちを聞こうとする姿が見られてきた。	B	A	・子ども達の生き生きとした表情がとても良い ・「今日は〇〇で遊ぶ」と、毎日喜んで園に出かけていることが保護者にとってはうれしい	・まだ自分の主張を通そうとする姿が多くみられ、相手の思いに気付いたり受け止めようとする姿は少ないと感じる。その為、結果ではなく一人一人の迷いや過程を大切に、寄り添う対応をしていき、相手にも様々な思いがあることを伝えていく
		友達とのかかわりの中で、子ども同士の思いや言葉をつなぐ役目をする	・日々の保育や園内研修の中で、子ども達一人一人の個性を正しく見取り、気持ちを受け止め丁寧に関わるよう意識したことで自分の気持ちを話す力が身に付き、友だちにも意識が向くようになった。	B	A		・自分の思いを伝える姿はあるが、相手の思いを聞き入れたり受け止めようとする力が弱い。嬉しい時や悲しい時に喜んだり悲しんだりしながら、感情の共体験を積み重ねていくような関わりをしていく。

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	発達や経験を考慮し、異年齢で関わる環境を整え、楽しさが味わえるよう援助する(園庭・廊下の活用・さくらんぼリズム等)	・コロナで園庭での遊び方が制限されていたが、緩和された事で遊びを通して自然な関わりが見られている。又、年上の子に優しくしてもらった経験をしたり、同じクラスの友だちを手伝ったり優しくしてあげる姿が見られてきた。	C	B	・コロナ禍であった為、安全の確保を考えると交流ができないことは仕方がないこと、先生方はその中でやれることはやってきたのだと思う	・園庭の使用制限があることから、公園の活用をしてきたが、場所や時間のずれから異年齢での関わりが薄くなっている。乳児と幼児が自然な形で触れ合えるよう、園庭だけでなく公園や園舎裏のスロープでも一緒に遊んだり、散歩の計画をするなど様々な触れ合い方を検討していく。
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	長時間保育児が増加しているため、体調や情緒の状態等を引き継ぎ、一人ひとりに合った対応をする	・玩具の入れ替えをして、遊びに変化を持たせることで落ち着いて遊んだり、早遅の時間を楽しく過ごす子が増えてきた。	B	A	・以前はデイサービス等でも交流があったが、コロナ禍になりデイサービスも現在は休んでいる状態なので、今後以前のような交流が持てることに期待をしましょう	・一人一人のその日の体調や疲労度で怪我に繋がることもある為、そういったことを予測しながら、保育者をその日の子どもの様子に合わせて増員するなど、子ども達の間でのフォローと安全が守られるようにしていく。
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子ども達の遊びの変化に気付いたり、次にどんな素材や道具を準備したらよいか予測して環境構成をする	・子どもの姿やつぶやきから興味関心を捉え、主体的に「やってみよう」と思える環境を工夫していった。自ら遊び出した、遊びが展開していく様子が見られた。	B	A	・小学校もコロナ禍で異学年、地域、学校間の交流が減っている現状があり、子ども達にとって大切なかかわりが減っていると感じている。こども園の現状と同じものを感じ、小学校より小さい子供たちなのでより大変であろうと思う	・保育者自身のアイデアや引き出しの不足により、遊びの発展が難しい場面があった。様々な感染状況によって職員同士が互いの保育を見合う機会がもてなかったため状況を見ながら研修をより実践的なものに工夫し、職員同士が助け合える体制を作っていく。
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	・ねらいを明確にした避難訓練や不審者訓練の実施し非常時の判断力を培う ・ヒヤリハットで予測した危険に対して事故防止の対応を考え実践する	・引き続き計画に沿って避難訓練や不審者訓練の実施を行い、反省点がある場合はその都度改善点を出し合い次回に繋げた。又、危険マップの作成や、ヒヤリハット掲示板の場所を毎日見える所に設置したことで意識が上がり、ヒヤリハット用紙の提出枚数が増えた。	B	B	・今年度は運動会を忠霊塔公園で初めて行い、先生方は様々な苦労があったと思う。もっと保護者会を使って構わない、子ども達の為なので、できることはやっていきたいと思う	・ヒヤリハットの傾向を分析し、マップにしたものをその後どう活用していくかが課題となっている。作成しただけでは終わりにせず、マップ作成後の成果の検証を行い、全職員に周知していく。
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	自分から進んで手洗いができるように、関りや環境の工夫をする	・トイレのペーパータオルのごみ入れを工夫した事で、小さく丸めて捨てるなど、ごみの捨て方が定着してきた。又、保育者の声掛けや子ども同士で気付き、声を掛け合うことで手洗いやうがいへの意識が高まり、より習慣化されてきた。	A	A		・スリッパや上靴がバラバラな時があるため、写真の掲示や細やかな見守りを行い、揃っている状態で使うことの気持ちよさを体感できるようにしていく。又、ペーパータオルをリサイクルごみにすることで、SDGsに繋げていく。
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	専門機関と連携した園内研修を行い、職員間で学びを確認し、対応に活かしながらその後の姿を報告する	・月に一度、個の関わりを会議の中で伝えることで、職員間で情報共有に繋がり、援助を統一したり援助方法を考えたりすることができた。	B	A	・迎えに行ったときに送っていったときにはなかった傷を見つけたが、「家からのケガですよ」と言われたことがあり、ケガに対してもう少し丁寧に見てほしいと感じた。乳児クラスで嘔み付きがあったと聞いたが、相手の保護者にも伝えているのか、対応にも丁寧さを求めたい ヒヤリハットに活かしてもらえたらと思う	・計画的に支援児会議を行い、より具体的な支援を行えるようにしていく。又、支援方法は全体で共有していくことで、支援の統一化に繋げる。その為にも会議の行い方や全体への周知方法を工夫する必要がある。
5 組織運営	(1)組織体制の充実	担当した分掌の年間計画に見直しを持ち、協力し合い、PDCAサイクルを実施する	・毎月の会議で各分掌の取り組みを周知し、共有することで分掌担当以外も把握することができ、園全体で協力しやすい体制をとることができた。	B	B		・職員会議だけでは全体への周知が不十分なこともあった為、分掌会議を開き、より細やかな情報共有を行っていく。
6 研修	(1)研修体制の充実	園内研修の中でスケッチブックを活用し、保育の語り合いを通して子どもの行動や遊びの過程、環境構成、保育者の関わりを共有する	・スケッチブックの内容に視点を定めたことで、あそび改善構想への意識をもって振り返りを行うことができた。又、発表時間を明確にすることで、ポイントを絞って相手に伝える力の向上に繋がっている。	B	A	・地域との連携では、R6年度より小中一貫校においてコミュニティースクールがスタートをする。その中で学校応援団が組織的になり、地域の人材を活用できるシステムができる。こども園もその人材を活用したらどうか	・スケッチブックを公開保育時の園内研修でも活用したり、付箋の記入方法を工夫しながら、各クラスの保育(子どもの姿・遊びの過程・環境構成・保育者の関わり)を共有し、全職員が参加できるような体制を作っていく。
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	毎朝、安全点検を行い、すぐに遊びだせる環境を作る	・毎日安全点検を実施し、各クラスの遊びに沿って早番で用意できるものは早番職員が準備するなど、すぐ遊び出せるようにした。又、各倉庫や教材庫の整理を行ったことで、使いたいものがすぐに取り出せるようになり、環境準備の効率化が図れた。	A	A		・室内の玩具はまだ整理しきれない箇所がある為、各クラス押し入れの精選、振り分けを行っていく。又、使った物は元のあった場所に戻すことで、常に整理整頓がされた状態を維持していく。
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	写真を使って、日常の子どもの姿や園での生活を見える化し、子どもの遊びの面白さや育ち等具体的な情報の発信をする	・毎日のドキュメンテーションの掲示、乳児は季節ごとの写真掲示を行ったり、全クラス合同のボードを出すなど、今までできなかった異年齢での関わりを発信することができた。又、子どもの育ちを伝えていき、見える化することで保護者も関心を示し、ボードをよく見てくれている。	B	A	・小中一貫にはその下の年代も加わる必要がある。幼小のつながりも強くしていきたいと考えているので、学校応援団のことも踏まえ、つながっていきましょう(小学校校長より)	・おたよりに写真を入れても白黒だと表情や様子が伝わりにくいこともある為、カラー版のおたより発行の回数を増やしていく。又、遊び以外の事(生活面・安全面・研修面等)に関する発信をする事で園での取り組みを保護者にも知ってもらえる機会を作っていく。
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の学校との連携の推進	・小学校へ出向き、小学生や教員との交流を図る ・引き続き校長と園長との日常的な情報交換を通し、互いの取り組みを伝え合う。また、その情報を職員間で共有し「つながり」を意識する	・コロナ禍の制限のある中ではあったが、おたよりの発行や公開保育に来ていただいたり、こども園の職員が公開授業に行かせても、互いの様子を見合うなど、様々な形で情報交換を行った。	C	B		・コロナ禍前と比べると、交流の場が大幅に減ってしまっている。交流の場がもてるよう、一年生の生活科のカリキュラムを聞いたり、図書館交流の依頼など園から積極的に様々な形での交流を提案し、実現に向けて取り組んでいく。
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	忠霊塔公園の活用、交流館での作品展示、公園(ドングリがある、バッタがいる)等地域について知り、遊びに必要なものを用意できる場として活用していく	・交流館で子ども達の作品を写真と共に掲示し、こども園の遊びや生活の様子を地域に発信した。地域の方との触れ合いとして、一緒にどんぐり拾いをしたり、絵本の読み聞かせを体験し、地域の方や場と繋がる機会をもつことができた。	C	A		・公園の活用はしているが、公共の場でもあるので、利用時間や遊び方を再検討し、地域の方も使う場ということを踏まえて利用していく必要がある。又、公園・園庭・保育室の役割や、各場所ですることできないことを考慮し、使う場を選択していく。